

大笑小笑目次

緒言

凡例

第一 人生 佛心顯現の世界

- 一 希くは此の謎を解け
こひねがは 此 なぞ と
- 二 墻外底の道は即ち禁内底
せうげてい みち すなは きんだいてい
- 三 一心現じて法界悉く道なり
しんげん ほふかいことく みち
- 四 他力の啓示は到る處にあり
たりき けいじ いた とこゝろ
- 五 米春禪師、米春けたりや
こめつきぜんじ こめつ
みやうらいあんこ あんこみやうらい
- 六 明來闍去、闍去明來
めいらい かくし とくめいらい
- 七 俱胝一指頭の禪
ぐてい ししとう ぜん
- 八 識らず廬山の眞面目
しし ろざん しんめんもく
ぶつまつ ぶつまつ
- 九 佛魔一紙の分水境
ぶつま ぶつま ぶんすゐきやう
- 十 蚊帳一つにても
かや かや

第二 自覺 沈痛なる自己發見

- 一 自己を知るは自己を修むる也
じこ じこ じこ をさ なり
- 二 鏡に向ふとき
かざみ むか
- 三 あゝ私映つてゐるのか
わたし うつ
- 四 自己を見失つた人々
じこ みうしな ひとぐ
- 五 自己に氣付かぬ人々
じこ きづ ひとぐ
- 六 自らなる自己の表現
おのづか じこ ひやうげん
- 七 躍つて出たぞ自己の性體
をど で じこ しやうたい
- 八 露れ出でたか心の地金
あらは い こころ ちがね
- 九 自己發見の戰慄
じこ けつけん せんりつ
- 十 自己徹底の道
じこ てつてい みち

第三

求道 大道坦然前に開く

一 昭々坦々淨邦に通ず

二 地獄の鬼か極樂の菩薩か

三 鬼の念佛親譲りの極樂

四 當然解決すべき生死問題

五 虚榮虚飾の夢から覺めて

六 慾知顔の慾知らず

七 思立つたを吉日に

八 驀直去、驀直去

九 切々道を求めて已まざれ

十 鏡面を打破し來れ

第四

聞法 虚に往きて實に歸れ

一 忘れてならぬ聞法の態度

二 勝手聞き、得手聞き

三 聞かず嫌ひ、知らず謗り

四 矢鱈聞き、聞き過ぎ

五 聞き心配、聞き怖れ

六 半途聞き、胡魔化し聞き

七 聞いたか風の早合點

八 聞えた振の不徹底

九 耳か心か自慢か

十 能く聞くことは至難である

第五

修行 已成の佛か當成の佛か

一 己やれ自ら立たずば

二 後頭禿げたか機會の神

三 我物と思へば輕し傘の雪

四 起てよ奮へよ今は時

- 五 盤珪禪師と明徳の修行
ばんけいぜんじ めいとく しゆぎやう
六 修禪鍛錬の勝海舟
しうぜんたんれん かつかいしう
七 覺醒の鞭か御慈悲の鞭か
かくせい むち おじひ むち
八 本眞劔の修行でなくば
ほんしんけん しゆぎやう
九 自分の棒で自分が叩かれる
じぶん ぼう じぶん たく
十 そんな筈ではなかつたに
はず

第六

救済 淨業は内に慈光は外に
きうさい じやうげふ うち じくわう そと

- 一 親縁、近縁、増上縁
しんえん こんえん ぞうじやうえん
二 親子の仲は格別
おやこ なか かくべつ
三 萬機普益の法門
ばんき ふやく ぽふもん
四 利劔即是彌陀名號
りけんそくぜ みたみやうごう
五 當にならぬ當
あて
六 往生成就の證據
わうじやうじやうじゆ しようこ
七 衆生の情に精通す
しゆじやう せいづう
八 苦勞するは誰が爲め
くらう たれ た
九 お慈悲の煙にまかれて
おじひ けむり
十 三世を貫く如來の救済
せ じゆい ついじ によひ けうさい

第七

信念 金剛の眞心徹到の端的
しんねん こんがう しんじんてつとう たんてき

- 一 全人格を打ち込んで
ぜんじんかく
二 徹見徹底の勇者
てつけんてつてい いうしや
三 底を究めて奥に届いて
そこ きは おく おくとく
四 身心脱落、脱落身心
しんくだつらく だつらくしんく
五 入れ智慧の不徹底
いれちゑ ふてつてい
六 眞似から出た本眞
まね でほんま
七 不斷の警策に驚かざるか
ふだん けいさく おおぞら
八 放下著、放下著
ほうげちやく ほうげちやく
九 佛我一體の徹底境
ぶつが たい てつていききやう
十 徹底眞悟の絶對境
てつていしんじ ぜつたいきやう

第八 讚仰 稱稱念念無碍の一道を

- 一 懺悔の大道を辿りつゝ
- 二 信心にて御慰み候
- 三 如何に稱へん彌陀の名を
- 四 觸耳觸目みな法縁
- 五 癖のいろく
- 六 佛法に厭足なければ
- 七 御恩が御恩と知られたら
- 八 信心の火ある處に
- 九 長生不死の神方
- 十 赤裸で參る彌陀の國

第九 勇奮 御恩の板か我慢の板か

- 一 板を擔ぐ人々
- 二 我慢の板を擔ぎつゝ
- 三 前後左右に擔ぐ人
- 四 御恩の板を擔いで
- 五 板の御蔭で毒が藥に
- 六 卸して見れば敵も味方に
- 七 下したら更に擔げ板を
- 八 擔いだら下してはならぬ
- 九 我が家業唯一筋の道をこそ
- 十 兩擔板漢の馬車馬式に

第十 清心 樹てよ流せよ佛地に法海に

- 一 唯これ謙虚の一道
- 二 人生の表裏、人心の明暗
- 三 六道輪廻の現在生活
- 四 泣くも笑ふも慾ゆるゑに

- 五 尊重すべき現在の一念
尊そん重ちやうすべきげん現ざい在の一ねん
念
- 六 金錢道德の修養
金きん錢せん道だう徳とくのしう修よう養
- 七 調情の修養
調てう情じやうのしう修よう養
- 八 内心の平和か平和の内心か
内ない心しんのへい和わかへい和の内ない心しんか
- 九 三毒三光の信念
三さん毒どく三さん光くわうのしん信ねん念
- 十 簡易生活の妙味
簡かん易い生せい活くわつのめう妙み味

第十一 輪轉 此の世踊の輪に似たり

- 一 何しに來たぞ何をしに
何なにしに來きたぞ何なにをしに
- 二 最古の問題か、最新の問題か
最さい古このもん問だい題か、最さい新しんのもん問だい題か
- 三 衣食と云ふか、人格と云ふか
衣い食しょくといはは云いふか、人じん格かくといはは云いふか
- 四 人生貧富苦樂輪轉之圖
人じん生せい貧ひん富ぶ苦く樂らく輪りん轉てん之の圖
- 五 道心の中に衣食あり
道だう心しんのなかに衣い食しょくあり
- 六 富に處して貧を忘れず
富とみにしよ處して貧ひんをわすれず
- 七 覺めよ醒せよ迷の夢を
覺さめよ醒さませよ迷まよひの夢ゆめを
- 八 忠實服業は最後の勝利
忠ちう實じつ服ふく業げふはさい最ごのし勝しょう利り
- 九 一紙一塵に籠る無限の感味
一い紙し一いち塵ちんにこもるむ限げんのかん味み
- 十 家貧にして道貧ならず
家いへ貧ひんにしよてみ道みち貧ひんならず

第十二 達觀 呪はんか歌はんか

- 一 笑うて暮せ人の世の中
笑わらうて暮くらせひとの世よのなか
- 二 笑ふも泣くも心一つ
笑わらふも泣なくも心こころ一いつ
- 三 苦しむも樂しむも
苦くるしむもたの樂たのしむも
- 四 如何に過さん人の世を
いいかかにすこ過すこさんひとの世よを
- 五 有用の生涯、有效の生活
有いう用ようのしやう生せい涯がい、有いう效かうのせい生せい活くわつ
- 六 人生果して不如意か
人じん生せいはた果はつた不ふ如に意いか
- 七 逆境の妙趣
逆ぎやく境きやうのめう妙しゆ趣
- 八 天地萬物は一體相關す
天てん地ち萬ばん物ぶつはたい一いっ體たい相さう關くわんす
- 九 茶漬の味
茶ちや漬づけのあじ味
- 十 常住の春の國に居て
常じやう住ぢうのはる春はるのくに國くににあ居あて